

資料室 ニュース Vol. 27

2005年12月27日発行

1995年1月17日5時46分。阪神・淡路大震災は、死者・行方不明者6,000人を超える、悲慘な被害をもたらしました。震災の記憶を風化させずに、被災者の思いや教訓を伝えていくために、人と防災未来センター資料室では、震災資料の収集・保存活動を続けています。

資料室では、来年1月17日から3月31日まで、『阪神・淡路大震災の資料と資料室～人と防災未来センター所蔵資料の歴史～』を開催し、震災資料の収集・保存の10年を振り返ります。



「過去」と「今」そして「未来」をつなぐ震災資料

震災資料研究主幹 矢守克也

本センターでは、昨年9月に「ミッション・ステートメント」を作成したのにあわせて、資料室でも、ミッションの確認、ビジョンの見直しを行ってきました。

ビジョンの中に、「約16万点もの大規模な震災資料を保存・整理し、その活用方策をたて、先例の少ない現代資料の扱いにおける先駆的な機関を目指す」とあります。「現代資料」、つまり、今を共に生きる人たちに関する資料を、資料室が取り扱っている点が重要です。11年前の震災は、物理的には確かに「過去」のことですが、そのことの意味は、「今」との関係で常に変化しています。資料は、単に「過去」を記録しているのではなく、「今」の社会のありようを映しだし、皆で「未来」を展望するためのツールなのです。

もちろん、このことは、資料の利活用のあり方が、多くの方々の「今」に直接に影響を及ぼしうることを意味しています。資料に含まれる個人情報問題は、その典型です。この問題についても、資料室は、一昨年から、専門家による検討会を重ね、対応方針を固めてきました。

「過去」と「今」そして「未来」とを繋ぐ資料の価値をあらためて確認した上で、これからも、震災の教訓を語り継ぐために、資料の収集・活用・発信の作業にスタッフ一同努力していきます。引き続き、ご支援、ご協力を賜われますようお願い申し上げます。

壁面展示

阪神・淡路大震災の資料と資料室 ～人と防災未来センター所蔵資料の歴史～

期間：1月17日（火）～3月31日（金）

場所：人と防災未来センター 資料室（防災未来館2F）

所蔵資料は、被災地の共有財産であり、その歴史は、震災被害や復旧・復興状況を記憶し、教訓として後世に伝えてほしいという人々の願いとともにあります。所蔵資料の歴史を通して、改めて震災資料の収集・保存とは何かを考えてみませんか？

資料収集・保存の経緯

1995(平成7)年1月17日 1995(平成7)年3月	阪神・淡路大震災(兵庫県南部地震) (財)21世紀ひょうご創造協会が兵庫県の委託を受けて、阪神・淡路大震災とその復興に関する資料の収集、保存事業を開始。
1998(平成10)年4月	(財)阪神・淡路大震災記念協会が収集・保存事業を引き継ぎ、継続するとともに資料の公開基準の検討を始める。
2000(平成12)年6月	兵庫県が「緊急地域雇用特別交付金事業」による大規模調査を実施。(～平成13年度末)
2002(平成14)年4月～	人と防災未来センターがオープン。同センター資料室が収集・保存事業を引き継ぎ、資料を公開。

資料室では、以下のような震災直後から復旧・復興の過程で使用・作成された「生の」資料である一次資料のほか、震災・防災に関する図書・ビデオなどの二次資料を多数収蔵しています。

震災の経験と教訓を未来に生かすために資料室をぜひご利用ください。資料目録はインターネット(HP:<http://www.dri.ne.jp>)でも検索できます。



一次資料

壁面展示では、人と防災未来センター3・7Fに収蔵している一次資料を救援物資、避難所、仮設住宅、ボランティアなどの項目に分けて、紹介しています。

一次資料の閲覧をご希望の方は、資料室までご相談ください。

紙

- 被災者の日記、手記
- ボランティアの活動日誌
- 救援物資配布表
- 自治会の日誌、報告書
- 仮設住宅申込書 など



モノ

- 5時46分で止まった時計
- 地震で壊れたゴルフクラブ、ハーモニカ
- 地震による火災で焼けて溶けたガラス、硬貨
- 炊き出し支援活動で使用した大鍋 など



写真

- 街中、住宅地などの被害記録写真
- 倒壊した建物の写真
- 救援活動の記録写真
- 仮設住宅の写真
- ボランティア活動の記録写真 など



音声・映像

- 被災者が撮影した震災の映像
- 仮設住宅の記録映像
- ボランティア活動の記録映像
- 復旧・復興の様子を撮影した映像 など



二次資料

当時の状況を伝える写真集やビデオ、復興・復旧に関する書籍、被災した学校の記録や発行された文集などを収蔵しています。所蔵資料は、資料室で開架しており、利用者が自由に閲覧できます。

GISを利用した「阪神・淡路大震災わたしたちの復興プロジェクト」 大学・高校生が「個人復興史」ホームページの操作方法を学ぶ

同プロジェクトでは、震災の経験と教訓を震災を知らない世代に伝えるために、震災・復興の体験や写真、思いなどを、「個人復興史」ホームページの地図上に入力し、インターネットを通じて、情報発信しています。文字情報のほか、個人所有の写真など震災資料も自宅のパソコンから入力できます。

この「個人復興史」ホームページを広く知ってもらうために、神戸山手大学学生計44人（6月30日、7月8日開催）と兵庫県立舞子高等学校生徒67人（9月13日開催）が、総合学習や防災学習などの講義・授業時間を利用し、「個人復興史」ホームページを閲覧しながら操作方法を学びました。



校名をクリックすると舞子高等学校生徒たちが提供してくれた資料の一覧や活動結果を見ることができます。

「個人復興史」HP : <http://www.dri.ne.jp>

GISとは？

地理情報システム（Geographic Information Systems）の略称で、文字や数字、画像などを地図と結びつけて、コンピュータ上に再現し、位置や場所からさまざまな情報を統合したり、分析したり、分かりやすく地図表現したりすることができる仕組みのこと。1995年1月の阪神・淡路大震災の反省等を契機に、政府におけるGISに関する本格的な取組が始まりました。

* 参加者の声 *

忘れ始めている震災について改めて思い出し、再確認することができた。
細かい情報があり、震災のときの状況がリアルにわかる。地域の細かい部分まで検索できることに驚いた。
防災マップとしての役割も担うようにしてほしい。
神戸だけではなく、新潟や各地に広げて、全国的なものにしてもらいたい。
今後の災害対策に役立つと思うが、家族を失った人たちがつらい記憶を思い出すかもしれない。

新着図書



題名	著書	発行者
正午二分钟前 外国人記者の見た関東大震災	ノエル・F・ブッシュ	早川書房
円山川決壊 台風23号記録と検証	神戸新聞但馬総局編	神戸新聞総合出版センター
被災地協働 第一回全国交流集会から	関西学院大学災害復興制度研究所編	関西学院大学出版会
災害救援の視点 - 神戸市長田区から世界へ	野田正彰、青木しげゆき、伊佐秀夫、池田清	関西学院大学出版会
復興計画	越澤明	中央公論新社
草野仁の緊急警告！必ず来る巨大地震 生死を分けるボーダーライン	テレビ朝日「ドスペ！」取材班編	朝日新聞社
地震に強い家に住みたい	保坂貴司	暮らしの手帖社
危険から身を守る災害・状況別 災害絵辞典	山村武彦	PHP出版
巨大地震と地震雲	「週刊現代」特別取材班	講談社
大地震の前兆 こんな現象が危ない	池谷元伺	青春出版社
災害時 帰宅支援マップ 首都圏版	アイドマ・スタジオ、センス&フォース	昭文社

ボランティアコーディネーターコース 震災資料を使ってワークショップ

11月28日から3日間、ボランティアコーディネーターコース（人と防災未来センター主催）が同センターで開催され、全国各地から32人が参加しました。

このコースでは、被災者・被災地のおかれた状況などを的確に把握し、実情に合わせた支援活動への視点を養うのが狙いです。



1日目は、まず、講師のひょうご・まち・くらし研究所の山口一史さんが震災直後の状況を説明しました。その後、資料室で収蔵している

震災当時の被災者、支援者、ボランティアの手記やメモなどをもとに作成された教材が各自に配られ、7、8人のグループに分かれワークショップを行いました。

テーマは「災害ボランティアとして大切なこと」。付せんに、避難所などで印象に残ったこと、マイナス・プラス面などを記入。互いの意見を共有しながら、模造紙上に、時系列や公私ごとに整理して貼りつけました。各班の発表では、高齢者、障害者ら弱者の問題への気づきや支え合う心、寄り添う支援、情報共有などの重要性について指摘しました。阪神高齢者・障害

者支援ネットワークの黒田裕子さんは、個々の状況の観察力を養い、行動してほしい、とアドバイス。参加者の山本倫子さんは、「『生



の』震災資料を用いることで、被災現場が実感でき、イメージもしやすく、入り込みやすかった」と話していました。

静岡県立松崎高校の生徒7人が 資料室を訪れました！

12月6日、静岡県立松崎高校2年の生徒7人がフィールドワーク（修学旅行）のため来室し、震災資料を用いて、学習しました。

医療とボランティアをテーマにした2グループが、事前学習として、予め質問事項をまとめたものをセンターに送付。その質問に対し、センタースタッフ、語り部ボランティアが回答。この日、生徒らは、語り部ボランティアの震災時の体験を聞いたり、医療関連資料などに触れ、理解を深めていました。感想の一部を紹介します。

治療に優先順位をつけるトリアージの話や資料が興味深かった。

地震の際、自分の住む地域はお年寄りが多く、自分たちの力（ボランティア）が必要とされていると実感した。

地震で、山が崩れると他の場所から孤立してしまう地域に住んでいる。災害が起きた時の対処法を教えてもらい参考になった。

語り部ボランティアさんの話を聞いて、死ぬかも知れないという考えから、生きたいという考えに変わりました。初めて「死」について考えることができました。話を他の皆にも伝えたい。



資料室(2F)は無料スペースです。

ご協力ください

資料室では、阪神・淡路大震災とその復興に関連するビラ、チラシ、ミニコミ紙などの紙資料、写真、映像、録音テープなどを収集しています。震災資料に関する情報もお寄せください。



資料室ニュース vol.27

発行日 2005年12月27日
発行 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター 資料室(2F)
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL:078-262-5058 FAX:078-262-5062
E-mail : info@dri.ne.jp
HPアドレス : <http://www.dri.ne.jp>
開室時間 9:30~17:30(7~9月は18:00)
閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日)
12月29日~1月3日